

福士 光生(ふくし・こうせい)

1、プロフィール

俳誌「十和田」「渋柿園」「萬緑」に所属。俳誌「きじ鳩」創刊代表、梁山泊俳句会顧問を務める。青森県俳句懇話会理事や俳人協会青森県支部事務局長、副支部長を歴任した。

<生没>

1933(昭和8)年5月14日 ~ 2020(令和2)年9月7日

<代表作>

ふにやふにやと生きて国書のことを言ふ
梅雨どきをなあなあといふ壺の中
冬の虹人間はまた歩き出す
蓮の骨悔いがあるから生きてゐる
安徳天皇を食うて海鼠となりにけり

<青森との関わり>

尾上町(現・平川市)生まれ。「十和田」や「渋柿園」等、県内の複数の俳誌や結社に参加し、県俳壇を牽引した。

2、作家解説

昭和8(1933)年、尾上町(現平川市)生まれ、本名は三智弘。県立黒石高校卒。昭和33年、尾上町役場に勤務、定年退職まで務める。

中学2年の時、担任教師の勧めで俳句を始める。その後、川柳に興味を持ち、青森県川柳社、柳誌「ねぶた」に所属、一時期、注目された川柳作家でもある。25年から28年まで俳誌「十和田」に所属。57年から23年間、俳誌「渋柿園」に所属し、藤田枕流、齊藤泥雪らと研鑽、運営委員も務めた。60年、川口爽郎の紹介で、俳誌「萬緑」(主宰中村草田男)に入会、芸と文学の一致を学ぶ。63年、俳誌「きじ鳩」を創設して代表となる。平成3(1991)年、第34回萬緑新人賞を受賞。その

12年後には、第50回萬緑賞を受賞した。〈春やこの母といふ樹は朽ち急ぐ〉〈冬そこに石抱くごとく母起こす〉〈数へ日の師の中へ妻加へけり〉15年から24年まで、俳句雑誌「俳句」角川俳句通信講座（添削指導）の講師を務める。17年から27年まで俳誌「萬緑」青森県支部長を務め、機関誌「未来」を発行。27年、梁山泊俳句会の創設に参画し、顧問を務めた。

昭和62年から平成10年まで青森県俳句懇話会委員、12年から26年まで理事。平成4年から8年まで俳人協会青森県支部幹事、9年から14年まで事務局長、16年から令和元年まで副支部長を務める。県内俳句大会においては、昭和60年、第39回青森県大会総合第1位青森市長賞、63年、第42回青森県俳句大会総合第1位青森市長賞、平成17年、第39回青森県観桜俳句大会第1位知事賞を獲得。その他の大会においても常に上位入賞を果たし、優勝回数は30を超え、選者も多く務めた。

句集には『序幕』（平成6年6月30日、本阿弥書房発行）、『福士光生物語』（平成27年3月10日、東奥日報社発行）があり、共著として北の鑑賞歳時記『日々燦句』（藤田枕流との共編、全4冊、平成17年9月30日～18年7月20日、北方新社発行）、四人句集『尾上・三戸・弘前』（平成31年2月15日、梁山泊俳句会発行）がある。